

THE Olympic Golf Club



AUGUST 2002 VOL. 6

日本でも・世界でもトップアマ

出席者 大川 清
榎野隆章

聞き手 五嶋雅徳 川島好彦

全日本クラブチャンピオンズ第41回報知アマゴルフ選手権がオリンピックGCで行われたのをきっかけに、大川清理事長と競技委員長の榎野隆章さん、フェローシップ委員の川島好彦さんにアマチュアゴルフの古き良き時代を語ってもらった。大川会長は日本アマチュアチャンピオン、榎野さんは日本オープンに何回も出場しておられ、川島さんはゴルフの知識が豊か、とそれぞれに話題豊富。日本アマ、日本オープン、世界シニアの思い出やエピソード、草創期のゴルファーたちのことで話は弾んだ。

1年でハンデが7に

五嶋「今回は理事長と榎野さんの対談の様子をフェローシップ委員の川島さんにもぜひ聞いていただこうと言うことでご登場願いました。川島さんは、ゴルフの腕はぼくと同じくらいですが、ゴルフ場のこととか歴史とか本に造詣が深い。今、オリンピックで報知アマをやってて、明日が最終日です。何人かの選手が非常に素晴らしいコースだと言っていました。榎野さんは、選手をごらんになりました？」

榎野「そうですね、学生選手が出てないので全日本とはちょっと違いますが、やはりレベルは高いですね」

五嶋「初日のトップは4アンダーとか」

榎野「ええ、きゃしゃな人ですよ」

五嶋「大川理事長も榎野さんもゴルフは40年以上されているんじゃないですか」

大川「私は昭和29年からですから、榎野さんの方が先輩じゃないですか」

榎野「僕は昭和30年からです」

大川「そのころ、皆さん麻雀ばかりやっていた。ゴルフする言うたら、おまえいつからブルジョワの仲間入りしたんだと、いわれて。ハハハ。冷やかされました」

五嶋「榎野さんは学生時代から？」

榎野「いや、学校出てすぐからです。私も麻雀の延長なんです。4人で麻雀して、4人でゴルフというのが昔、ゴルフを始めた人のほとんどです。麻雀付きのゴルフ、ゴルフ付きの麻雀」

五嶋「僕は会社の先輩や同僚に無理矢理連れて行かれた。理事長は初ラウンドのスコアはいくつでした？」

大川「河川敷のくずはゴルフ場でしたが、ハーフで60なんぼ。120から30の間だったと思うんです」

五嶋「それでシングルになられたのは？」

大川「定かじゃないです」

五嶋「2年くらい」



大川「いえいえ」

五嶋「10年20年てことはないでしょ」

大川「昭和34、5年だったかな、箕面GCへ行ったら顔の黒い男が来て、あんた大川さんですか、という。ここのプロの前田です、あなたものすごく力が強いんですね、力の強い人が来てるから教えてあげると、社長に言われて来たんです、と、こういう。そりゃ、ありがたい、となって。そのころハンデ30以上あったでしょうが、その年の暮れに7になったんです」

五嶋「1年でいくつ縮まった？」

大川「むちゃくちゃ、縮まったわけです」

川島「えっ、30から7に」

五嶋「1年で23も…」

大川「ですから本当に熱心に教えてくれるわけですよ。月例出たら優勝、理事長杯もキャプテン杯もクラブチャンピオンも、スクラッチも全部優勝した。で、ハンデが下がる、下がってもまた優勝する、というふうなことを繰り返しているうちに、そうなった」

半年で8に

五嶋「榎野さんは、最初のゴルフ場はどこですか」

榎野「親父、兄貴が宝塚GCでしたから宝塚がスタートです。最初にもらったハンデが13なんですよ。2か月目が10で、3か月目が8なんですよ」

五嶋「へーっ、すごい」

榎野「ちょっと早すぎる（笑い）」

五嶋「6か月で13から8まで、すごい」

榎野「あんまりぎょうさんのスコアを知らんのですよ。すぐに関西アマと関西オープンに出してもらって、日本アマも出してもらって」

五嶋「それは20代ですか」

大川「ええ、20代で」

五嶋「大学を卒業なさってすぐに？」

榎野「はい、はい。でも、ま、それはとにかく大川さんはすごいプレーヤーでしたよ」

五嶋「お二人とも一年の間に23と8減らした。センスがあったんでしょうね」

中部銀次郎と一騎打ち

五嶋「大川さんは関西アマは？」
大川「関西アマは取ってないんですよ」
槇野「関西アマはアマ界ナンバーワンといわれていた中部銀次郎と決勝で大デッドヒートしたんです」
五嶋「中部と？」
大川「あの当時はマッチプレーでした」
槇野「マッチプレーといっても144ホールやるんですよ。最後まで行ったら。まず36ホールの予選があるんです。2日目も3日目も4日目も毎日36ホールやるんです」
五嶋「全部マッチプレーですか？」
槇野「最初の36ホールはストローク。それで16人に減らして8人、4人と減って最後は2人。マッチですからゲームセットの時は144まではいかないですが、行けばそうなります」
五嶋「ふん、ふん。で、大川さんが中部と戦われて、中部が勝ったわけですね」
槇野「宝塚でね」
五嶋「それはおいくつの時でした」
大川「うーん、忘れました」
槇野「40歳ぐらいでした？」
大川「過ぎてましたね」
五嶋「40過ぎて、144ホール。最後はどういう負け方だったんですか」
大川「私ね、そういうことに無頓着で」
槇野「5つ6つ差が開いてたんじゃないですか。でも、それからがすごいんですよ。4日間がすんだらクラブを握るのもいやになりますが、その日の夕方、江坂の練習場で大川さんに会ったんです」
五嶋「ほう」
川島「あら」
大川「フフフフ」
槇野「前にね、こんなに（山のように）ボールを積んどるわけですよ。で、どうだったんですかと、聞いたら一番からずっと説明してくれるわけですよ」
大川「記憶にないなあ（笑）」
槇野「しゃくに触ったんでしょうね。それで次の年に日本アマ取りはったわけですね」

まっすぐを打つ技術

五嶋「初出場で初優勝ですね。その時のことは覚えてませんか」
大川「昭和43年かな」
槇野「そのころの大川さんは無名の選手だったんですが、僕はよく知ってました。とにかく球をまっすぐにはか打たない。プロでも曲げるのに。そのちょっと前に、エキシビジョンで宝塚に来たアメリカ人のプロ、えーっと誰だったか」
五嶋「ビリー・キャスパー」
槇野「そうそう、で、彼がね、打ってくれるわけですね。ドライバーでフック、それからスライス。今度は一番難しい球を打ちます、と言ってストレート。」



ストレートが難しいなんて誰も思わないわけですよ。大川さんはそのむずかしいまっすぐのタマばかり打つ、すごい選手でしたよ。ある人はパターがへたやと言うてたけど、「モイ」というパターでよう入れてました」

大川「そうですか」
五嶋「その時はストロークプレー？」
大川「ストロークの初年でしょう」
川島「なぜマッチプレーからストロークプレーに変わったんですか」
槇野「中部銀次郎がアンフェアだと言い出したんですよ。昔はプロ、アマ一緒になってもマッチだったんですが、世界はストロークが主流ですからね」
五嶋「中部銀次郎の発言で？」
槇野「そう、変わったんです。そのころ中部銀次郎というのは大変な選手ですから。それからずっとストロークになった」
五嶋「槇野さんも茨木CCの大会は出られたんですか」
槇野「ええ、出ました。大川さんを見て歩きましたから予選で落ちたと思いますが、ひょっとしたら残ってて最終何ホールかを見たのかも…。」
五嶋「槇野さんはオリンピックGCの昨年のシニアチャンピオンですが、宝塚でもクラブチャンピオンに何回かなられたとか」
槇野「3回です。オリンピックではシニアで4回ならしてもらいました」
五嶋「会長はクラブチャンピオンは何回？」
大川「クラブチャンピオンは私は……」
槇野「遠慮、遠慮」
五嶋「オリンピックは遠慮されているのは分かりますが」
大川「いやオリンピックだけじゃなくて、箕面で一回取って、池田CCでは日本アマ取ったから遠慮して出場しなかった」
川島「別格なんですよ」

中部銀次郎全盛の時代

五嶋「それではお二人に日本アマに出られたときの思い出を」
大川「宝塚の新コースで、あまりボールも曲がらなかったから距離も出たし、グリーンに乗せる率はよかったと思う。でも、高麗の順目と逆目の読みが難しかった」
槇野「新コースの方は難しいんですよ。旧コースははっ

きりしている。」

大川「最終18番は3パットしました。優勝を目標にするとかしてたならもう少し記憶もするでしょうが、そんな考えがないから一緒に回ったパートナーが誰だったかすら覚えてない。スコアも覚えてない。確かコースレコードだった」

五嶋「コースレコードで勝たれたんですか」

大川「茨木の西コースでね、68かでしたよ」

五嶋「ぼくらは80も切れないゴルファーで（笑い）。日本オープンは？」

大川「何年か経って自分で自分のレコードを更新しましたよ」

五嶋「槇野さんは日本アマは何回出られましたか」

槇野「10回、いや15回か。枯れ木も山のにぎわいで（笑い）」

五嶋「槇野さんの日本オープンでの一番の思い出は？」

槇野「そうですね。ローアマになれると思ってても中部がおるからあかんあという思いが強かった」

五嶋「中部の全盛時代ですか」

槇野「ハイ。もうむちゃくちゃうまかったですね。とくにゴルフの組立がうまい」

大川「組立もショットも素晴らしいですよ」

槇野「アマチュアの超一流です。あのプロの陳清波を批判したくらいですからね。」

五嶋「どういう具合に？」

槇野「ドローボールしか打たない、と言ってね。ちょっと生意気だったようです」

大川「彼（陳）が弱いのはドローしか打てないから、と」

槇野「今でしたらアマチュアがプロのトップを批判できないですよ」

ライバルであり仲間だった

五嶋「それくらい力があったんですね。さて、何か日本アマ出場当時のプレーの思い出は？」

槇野「私たちの時代は関東も関西も九州も全国皆、仲良しだったんです。だから関東の鍋島直泰さんでも呼び捨て」

五嶋「佐賀の殿様の孫？」

槇野「孫か曾孫ですかね」

五嶋「おしゃれな方だったらしいですね」

槇野「ズボンの線を内側に入れてそれに合わせて立つとか」



五嶋「彼らと一緒にゴルフをした後、京都で飲んだり、東京で飲んだりして交流を深めたという話を以前伺いましたね」

槇野「東西対抗というのがありまして、一緒に泊まって麻雀して。そういうのが今はないですね」

五嶋「関西にはそのころどんな選手が？」

槇野「やはり中部銀次郎です」

五嶋「関東は？」

槇野「鍋島とか、日大出身の選手もありましたね」

五嶋「年に何回やってたんですか」

槇野「日本アマの前日にやるんです。名古屋が多かった」

大川「京都ゴルフは和合と姉妹コースになっていて」

五嶋「京都ゴルフのメンバーになっておられたんですか」

大川「そうです」

五嶋「そうすると成宮喜兵衛さんが京都ゴルフのメンバーで」

大川「そうです」

五嶋「太った方で、アップダウンのきつい所はキャディーが後ろから押していかなきゃならないという話を聞きました」

川島「ハハハ」

五嶋「そのキャディーをしてたのが僕の知り合いのプロになった男で、成宮さんのお尻を押すのが仕事だったとぼやいていました」

大川「ハハハハ。一番楽しいのは、成宮さんだったね」

川島「そのころ京都のキャプテンでしょ」

槇野「呉服屋さんでしたね」

大川「そうです。京都一の呉服屋さん」

大川「賀茂川で丁稚に新しいボールを置かせて、バーンと打ってたとか、飛行機に乗ってゴルフして回ったのは成宮さんだけとかいろんな話あります」

一杯だけの祝杯

五嶋「それで、世界シニアを取られたのが何年ですか？」

大川「1981年です」

五嶋「今から21年前、どこでやったんですか」

大川「アメリカのコロラドで」

五嶋「世界からどれくらい集まったんですか」

大川「32、3カ国。2日間ストロークプレーで上から32位じゃなくて32人を取って、その32人が5日間のマッチプレーをするんです」

五嶋「じゃ、7日間の競技をするわけですか」

大川「全部勝ったら優勝です。ハハハ」

五嶋「シニアですから50歳を超えているわけですね」

大川「55歳でした。大きい人たちにドライバーで負けなかったんですよ。コロラド行く前にハワイのワイアラエCCでプロと一緒にラウンドしてもドライバーは私が上、風のきついオアフで女子プロと回って、戸田藤一郎プロに教わった低いボールやフック、スライスを打ってピンそばにぴたりとつけると、女子プロが先生になってくれという。ベブルビーチGLやどこに行ってもオーバー（パー）しない」

川島「前哨戦というか1か月くらい照準を合わせて来られたわけですね」

大川「悠長なもんです」
 五嶋「コロラドは何というコースですか」
 大川「ブロードモア (The Broadmoor GC) というコースです」
 五嶋「予選の2日間は何位でした」
 大川「記憶ないんです。とにかく32人の中に入っている」
 五嶋「決勝のマッチプレーは？」
 大川「もちろん覚えてない。アンダーはけっこう出てると思うんだけどマッチは最後までしないから分からない」
 川島「決勝の5日間も圧勝という感じですか」
 大川「一番少ないので3アンド2ぐらいかな」
 川島「初出場で圧勝」
 大川「そうですね、なんだか知らんが (笑い)。この大会はオーストラリアが一回優勝しただけで後は全部アメリカが勝っている。ところが、前年度のチャンピオンに勝って新聞に大きく出てしまった」
 五嶋「ほう」
 大川「傑作なのはその日から世界の選手が私を応援するようになった」
 川島「アメリカ対世界ですね」
 大川「そう。アジアはもちろんヨーロッパも全世界が私の応援。こうなるとおそろかにできん」
 五嶋「勝った相手はアメリカ人ばかりでしょ」
 大川「勝負がついたとたん、相手の応援団が集まってきて私に奥さんや仲間を紹介する。私をいい選手だとほめる。私は、ただ少しラッキーだったと挨拶を返す。私が何かお飲みになりませんかという、一人残らず付いてくる。思い思いのものを注文して、明日も勝ってくださいといって2杯は飲まずにさっさと帰っていく。清々しいと言うんですか、学びました。これがゴルフ精神かなと」
 横野「宝塚も昔はそういうことがありましたね」
 大川「京都もそうでした。茶店でも後輩がうっかりサインでもしようものならしられました」
 横野「大川さんはケネス・スミス (Kenneth Smith) というクラブを使っている。こんな使いにくいクラブはないと親父から聞いたんですが」
 大川「優勝したときケネス・スミスの社長が来てほっぺたくっつけて、ありがとう、って (笑い)」
 五嶋「そうですか、へーっ」
 大川「前田プロと戸田さんのおかげですよ」



練習場には一本だけ

五嶋「メンバーの方への練習方法のアドバイスは？」
 大川「戸田さんも言っていた。練習場に1本だけ持って行きなさいと。本当にドライバーが練習したかったらドライバーだけ。13本持っていったらたとえ300個打っても1本に対して何個にもならない。一本のクラブで200でも300でも500でも打って自分のキャリーボールを確認する。それからフックスライス、低いボールを打てるようにする。5番を練習したなら4番と6番が打てるようになる」
 川島「うんうん」
 大川「8番なら7番と9番が打てるようになる。その練習をしてコースに出て、その距離に当たったら楽しくてしょうがない」
 五嶋「そうですね」
 大川「グリーンを外しません。人間はけちで、池に何百円がちゃぽんと落ちるとすごく惜しくなる。厳しさの意識が違ってくる。いざという一発に強くなる」
 五嶋「横野さんは何か？」
 横野「感心して聞いておりました。私もいろいろやってみましたが、ラウンドの前に打つよりもラウンドした後に打つ方がいいですね」
 川島「復習するわけですね」
 大川「正しいですね」
 横野「なかなか、ようやくとりませんが (笑い)」

毎日歩いて、ゴルフ

五嶋「理事長がご自分のゴルフ場を作りたいと思われた理由は？」
 大川「諸外国ではその国のチャンピオンを取った人がエントリーできんと言うことはなかった。友人が来ても急にはエントリーできなくて、それで自分のゴルフ場をと。それに健康目的だね」
 五嶋「日頃どんな風に健康に気を使っておられますか？」
 大川「毎日歩いたりゴルフしたりしています」
 五嶋「理事長にはいつまでもお元気でやっていただきたいですね」

(あとがき)

ほんとうにいいお話を聞かせていただいた。日本の・世界のトップアマが何人かおられるクラブでプレーできることは幸せである。また、いろいろと教えていただきたい。

大川 清のひとりごと 「クラブライフ」

アメリカ合衆国のコロラド州デンバーに私の友人が住んでいる。彼は冬季オリンピックのクロスカントリー種目韓国の代表選手であった。大学は日本の早稲田を卒業し、その後世界一周無銭旅行を達成したとてもユニークな経歴をもっている。その後アメリカに移住し、現在衣料関係の会社を経営しながら5年ほど前には有志と地元で銀行を発足させ、頭取として務めている。とても行動力のある根っからのビジネスマンである。

彼の家を訪ねた時のことである。彼の自宅はデンバーのダウンタウンから車で20分程の住宅街にあり、裏庭はゴルフコースとつながっている。ゴルフ場の周りに住宅が隣接しているのである。今では日本でもよく知られていることだが、20年以上前の当時、その素晴らしい環境を見てとても驚くと共に羨ましく思った。ある日の夕方、彼が私に「今からプレーしましょう！」と自分の庭からプレーを開始し、適当なホールを選んでプレーし家に戻るのである。冬の時期には、コースに雪が積もったらクロスカントリーを楽しむそうだ。ゴルフ場にはテニスコート、プールもありクラブハウスの中にはレストラン、バー、カードのプレールームと幾通りもの楽しみ方がある。当時ジュニアハイスクールの娘さんは学校から帰ると友だちとテニスを楽しんでいた。自宅にお客様が訪問し外食する場合は、大抵ゴルフ場のレストランを利用する。週末にはクラブハウスのレストランでダンスパーティ、結婚披露宴、誕生パーティなど様々なイベントが行なわれる。ディナーを利用する場合は正装をして家族全員で出向く。ドレスアップするのもひとつの楽しみのようだ。クラブハウスでも、コースでも会員同士とても気さくな挨拶し、その交される楽しい会話には笑い声が一杯である。従業員もとてもフレンドリーで気持ちがいい。まさにクラブライフを楽しむ環境が整っている。プレースタイルもとても自由で開放的であるが、特に感心したのは品性と礼儀正しい雰囲気がクラブに漂っていることである。かしこまったルールは必要としないのはある意味では当然のことなのかもしれない。クラブは、わきまえた人たちの集りなのだから…。

そのクラブに入会するには、先ず申込をするとクラブハウスの掲示板に一定期間写真入りのプロフィールが張り出され、反対者が出なければ入会することが出来る。終身会員制度なので入会金はそれほど高くはないが退会しても戻らない。年会費は、クラブによって違うが30万円位と日本に比べると高いが会員はプレーごとのプレーフィを支払う必要が無い。一会員の年間のゴルフ場利用目標額があるのでプロショップ、レストラン等のゴルフ場の施設をよく利用する。だから、運営はゲストプレーフィに頼らなくてよいのである。日本のゴルフ場のような過剰なサービスはだれも求めない。あくまでもスポーツクラブであり、会員がクラブの中心であり、ゴルフ場はその地域の社交場なのである。

